『悲しみの中に立つお方』ヨハネ11:28-37

11:28 マルタはこう言ってから、帰って姉妹のマリヤを呼び、「先生がおいでになって、あなたを呼んでおられます」と小声で言った。
11:29 これを聞いたマリヤはすぐに立ち上がって、イエスのもとに行った。
11:30 イエスはまだ村に、はいってこられず、マルタがお迎えしたその場所におられた。
11:31 マリヤと一緒に家にいて彼女を慰めていたユダヤ人たちは、マリヤが急いで立ち上がって出て行くのを見て、彼女は墓に泣きに行くのであろうと思い、そのあとからついて行った。
11:32 マリヤは、イエスのおられる所に行ってお目にかかり、その足もとにひれ伏して言った、「主よ、もしあなたがここにいて下さったなら、わたしの兄弟は死ななかったでしょう」。
11:33 イエスは、彼女が泣き、また、彼女と一緒にきたユダヤ人たちも泣いているのをごらんになり、激しく感動し、また心を騒がせ、そして言われた、
11:34 「彼をどこに置いたのか」。彼らはイエスに言った、「主よ、きて、ごらん下さい」。
11:35 イエスは涙を流された。
11:36 するとユダヤ人たちは言った、「ああ、なんと彼を愛しておられたことか」。
11:37 しかし、彼らのある人たちは言った、「あの盲人の目をあけたこの人でも、ラザロを死なせないようには、できなかったのか」。

●序論
今日お読みしている、兄弟ラザロの死をめぐって姉妹のマルタやマリヤ、それぞれがその悲しみを抱えて、そこでイエスさまを迎えました。先週は、気丈にふるまうマルタの姿を見ました。そんな彼女でもイエスさまに言わないではいられなかった。
:21 ･･･「主よ、もしあなたがここにいて下さったなら、わたしの兄弟は死ななかったでしょう。
それは正直な彼女の思いでした。イエスさまは、その彼女の言葉も思いも受け止めてそこに立ち、そして「よみがえりの命」のことを語られたということを見ました。
今日マリヤも登場するわけですが、改めてこの物語を弟子ヨハネが取り上げた、その最初に皆さんと何度か共に読んだ言葉を思い出していただきたいのです。
11:5 イエスは、マルタとその姉妹とラザロとを愛しておられた。
これがこの物語のすべてを貫きます。すべて、ラザロそしてマルタを、またマリヤを愛しておられたイエスさまの姿と言葉、みわざなのだと覚えていただきたいのです。

●本論
Ⅰ．その悲しみを受けとられる
マルタを通してイエスさまの言葉を聞いたマリヤもまた、イエスさまのもとに来ました。そして彼女を慰めていたユダヤ人たちも一緒についてきました。
:32 マリヤは、イエスのおられる所に行ってお目にかかり、その足もとにひれ伏して言った、「主よ、もしあなたがここにいて下さったなら、わたしの兄弟は死

ななかったでしょう」。
マルタと同じ言葉が口をついて出てきた。そこに、抑えきれない無念さを感じます。
一方で、マルタとの違いもわかります。
イエスさまの足元に「くずおれて」口にした言葉であったことがわかります。
そして彼女は、ただ泣いていたのです。
:33 イエスは、彼女が泣き、また、彼女と一緒にきたユダヤ人たちも泣いているのをごらんになり、･･･

ここでマルタとマリヤを語るとき、そのありさまの優劣を語っているのではありません。ここにあるのは、彼女たち姉妹の悲しむ、それぞれの姿を描いて、わたしたちもまた自分の姿と経験を重ねることができるようにしてくれている…ということなのです。
気丈にふるまい、理性的にイエスさまを迎え、その信仰を言葉にしたマルタ。
ただ泣くしかできずイエスさまの前にくずおれたマリヤ。その両方がラザロの死をめぐって打ちのめされた悲しみを抱えてイエスさまの前にあるのです。

この福音書の記者ヨハネは、聖霊の感動を受けてこの出来事を思い起こしつつ記しています。その上で、そのすべてを覆う言葉があります。
11:5 イエスは、(その)マルタとその姉妹とラザロとを愛しておられた。

このイエスさまの愛がこのすべての出来事を覆うのです。それで2番目のポイント･･･

Ⅱ．心を激しく震わせられる
:33 イエスは、彼女が泣き、また、彼女と一緒にきたユダヤ人たちも泣いているのをごらんになり、激しく感動し、また心を騒がせ、そして言われた、「彼をどこに置いたのか」。

イエスさまは、悲しみの現場においでになりました。それは、ある意味、もうすべて終わってしまったあとの現場でした。友人であるラザロは死に、そしてすでに葬らた後です。あとは、残された人たちと彼のために集まった多くの人たちの悲しみと喪失感がそこに満ちていた
その中で、イエスさまは(別訳)「霊の憤りを覚え、心の動揺を感じて･･･」とあります。
そして、さらには　”11:35 イエスは涙を流された。”のです。

イエスさまが、何を悲しむ必要があるのでしょう？　この後の顛末をご存知じゃないか。ラザロを生き返らせるためにここに来たはずじゃないか。
だから、彼らと共に泣く必要はないお方のはずです。
けれども、事実イエスさまは、そこで心を震わせ、涙を流されたのです。

不思議に思うでしょう？･･･でもそれがイエスさまというお方なのです。
その現場には、悲しみに泣きくれるマリヤたちがいました。
イエスさまは彼女たちに、「泣いてないで、なぜ私を信じない？」とその場で言うこと

もできたでしょう。
今わたしたちが、葬儀に出る時、わたしたちは聖書から教理的に、論理的な人は、復活を語ることはできます。そして信仰的な人はによって、そこで悲しむ人たちに「悲しむ必要はありません」いや「悲しむな」ということもあるでしょう。

けれども、わたしたちの主イエスさまは、すべてのことをご存知でありながら、またご自身がこの後、生き返らせるというをみわざを用意しておられていることを知りながら、彼女たちとともにそこで心を震わせ涙を流してくださるお方なのです。
「今！、悲しんでいる人がいる。涙する人がいる」という時、イエスさまは、乾いた言葉で、それをただ退ける…というのではなく、その悲しみと痛みに心を共にしてくださり、その悲しみの中にともに立ってくださるのです。

聖書はイエスさまについてこうはっきり言います。
53:3 彼は侮られて人に捨てられ、”悲しみの人で、病を知っていた”。
「悲しみの人」というのは、その悲しみと痛みを誰よりも知っている人…ということです。そして「共にいて共に悲しみを負ってくださる人」という意味です。

イエスさまは、上から、信仰の言葉を知的・論理的に語る方ではなく、そばにいて悲しみをも共有しつつ、信頼することの大切さを気づかせてくださる方なのです。

Ⅲ．この方に愛が見えているか？
福音書の記者ヨハネは、「愛されている弟子」として自分をあらわすように、イエスさまの語る言葉、なさる御業のすべての中に、イエスさまの愛を見いだしています。
そうしてここでユダヤ人たちの言葉を引用します。
11:36 ･･･、「ああ、なんと彼を愛しておられたことか」。
しかしもう一方で、それを批評家的に見る人たちの姿もそこに書き記しています。
11:37 しかし、彼らのある人たちは言った、「あの盲人の目をあけたこの人でも、ラザロを死なせないようには、できなかったのか」。

ある人はイエスさまの深い愛に目を向け、ある人は、イエスさまが「あれをしなかった、できなかった」というふうに目を向ける。
それは信じたくない人が持ち出す　心の屁理屈かもしれません。
でも、その見方のすべてを一蹴する言葉もあの言葉です。
11:5 イエスは、(その)マルタとその姉妹とラザロとを愛しておられた。
･･･からなのだと

●さいごに
イエスさまは、「激しく感動し、また心を騒がせ･･･、そして涙を流されました」。
この事を記した聖書の理由、そして目的は、泣き虫なイエスさまを語るのではなく、その涙がどれほど美しかったかを語るのでもありません。
11:5 イエスは、(その)マルタとその姉妹とラザロとを愛しておられた。

　　･･･からなのです。
　その愛によって、今も愛する人の死を悲しむことのあるわたしたち、理不尽に思えるような痛みや悲しみを経験するわたしたちの悲しみに寄り添うイエスさまの姿が浮かびがってくるのです。

だからこそ、イエスさまは、その死の悲しみをも背負ってあの十字架に向かってくださったのです。　あの十字架は、わたしたちを愛するイエスさまの愛のしるしです。

わたしたちは、これからもなお、さまざまなところで別離や悲しみを経験することがあるでしょう。涙することがあるでしょう。
そんな時、そのありのまま悲しむことでよいのです。それを信仰的にさまざまな解釈を加えることではなく、そばでともに涙してくださるイエスさまがいることを覚えましょう。またわたしたちもそういうイエスさまにならって、一緒にその悲しむことをも共にできるのです。そしてイエスさまのいのちのみわざに目を向ける者とされていきたいのです。
　なぜなら、ともに涙してくださるイエスさまは、あのラザロに起こした奇跡のように、信じより頼むわたしたちに次の恵みを備えてくださっているからです。